ふるさとつくろう

北区・藍那に集う人たち [8]

触れることで守る意識

里山学

「ここに里山大学をつくり、里山学を実践したい」

北区山田町藍那（あいな）に整備中の国営明石海峡公園。環境学が専門で、公園事務所と共同研究を進める甲南大学環境総合研究所所長の谷口文章さん（六）は熱い口調で話した。

谷口さんの研究テーマは、里山と人間の関係や自然を通じての教育。里山そのものが教科書だ。

荒れたとはいえ、広大な里山が残る藍那は格好のフィールド。開園前の段階から、市民団体が公園の運営を模索する藍那を舞台に夢はふくらむ。

谷口さんは文学部の授業や生涯学習講座を、藍那で実施してきた。学生や参加者の多くは、手つかずのものだけが豊かな自然だと考えている。そこで、人間が適度に山に入ることで維持される環境があることを伝えるという。

昨年十、十一月、藍那であった同大学の「ひょうごオープンカレッジ」。大学生から七十歳代まで約四十人が藍那に集まった。落ち葉が積もる山道を歩き、見慣れぬ草花に鼻を近づけてみる。

「保全ばかりを訴えるのが環境学習ではない。大人も子どもも実際に見て、触って、楽しんで心に刻まれる。そこから担い手が生まれるはず」

大人中心の藍那の市民活動の中で、「学半舎」という学生グループは、子どもを主人公にしている。

月二回の昔遊び。草花の名を覚え、今の季節はカマキリの卵に触ってみる。遊び道具はなくても、子どもたちはおにごっこや駆けっこをしながら、自分たちで遊びを見つけられるようになる。

木登りを怖がったり、水を張った田に裸足で入れない子どももいるが、それは最初だけ。

「ここで遊ぶと、みんないい顔になる。それが自然の力と思う」とスタッフの竹尾るみさん（四）は話す。

公園は、県教委が小学三年生向けに進める環境学習の候補地のひとつだ。今春から子どもたちの歓声が藍那に響くかもしれない。

◇

「最も大切なのは、里山を愛する人を育て続けること」。谷口さんはそう説く。

希少種も生息できる環境のため、人は何をすればいいのか、先人から何を学ぶべきなのか。里山大学で専門家や藍那の人から学び、卒業生が次の世代に里山を受け継いでいく。

「藍那なら守りたいと思う気持ちが生まれる」

谷口さんの夢はいつしか人づくりへと変わっていった。

開園後の公園の活用を市民が探るという例のない試みが続く藍那。神戸では貴重な広大な里山や棚田の再生、危機にある希少な動植物の保護はまだ間に合う。だからこそ集う人たちは夢を描く。ここを明日のふるさとにしたいと。

（上田勇紀）

＝おわり＝

夢中になって遊ぶ子どもたち。藍那に来るたび、たくましくなる―北区山田町藍那

神戸新聞 東部

■本社社会部■
〒650-8571
神戸市中央区東川崎町1-5-7
TEL:078-362-7040
FAX:078-360-5501
e-mail:kobe-ban@kobe-np.co.jp

■北神支局
TEL:078-741-5814

■読者センター
TEL:078-362-7056

火事や事故の速報、写真提供、身近な話題、生活情報を上記へ気軽にご連絡ください。

石碑のアサヒ
墓所・墓石リフォームご用命は
旭銅石株式会社
☎078(681)1558

まちかど・スナップ